
ENGLISH WORDS 2

澤またし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ENGLISH WORDS 2

【コード】

N8181Q

【作者名】

澤またし

【あらすじ】

受験には役立ちません。英単語集『システム英単語』の収録語をお題にした短編集、第二弾。

1・rush(前書き)

第一弾をご存じの方も、初めましての方も、よろしくお願ひします。
前回の物を百話で完結とし、新連載として始めました。

更新は非常に遅いですが、ご興味を持っていただけたなら、ゆっくりとお付き合い頂ければ幸いです。

「ほつといてくれ」。

男の口癖だった。精力的で勤勉な男はいつも忙しそうに立ち働き、休むということを知らないかのようだった。だから、知人が心配してしばしば声を掛ける。

「そんなに急がなくてもいいんじゃないか」。

けれど男の答えはいつも同じ、「ほつといてくれ」だ。

男が三十台手前で結婚することになり、式の後八ネムーンに向かった。帰りの飛行機の中で、男はもう翌日の仕事の準備を始めており、さすがに困惑した新妻が「こんな日くらい」と笑みかけた。

男は目も上げず言った。

「ほつといてくれ」。

昇進し部長と呼ばれるようになってますます駆けずり回るようになり、歳のせいもあってか一度倒れた。男は自力で救急車を呼び、運転士を急かし、医者も急かし、最短期間で強引に退院して見せた。病み上がりもなお以前と同じペースで働き続ける彼を見るに見かねた部下たちは、揃って休みを取るよう説得しに行った。

「ほつといてくれ」。

執念じみた目に、もう誰も何も言えなくなった。

男は仕事をし続け、順調に昇進を続けた。しかし形として成功が見えても、一度としてニコリともしなかった。

「私はやり続けるだけだ。ほつといてくれ」

血眼で働き続けるその姿は、まるで生き急いでいるようでもあり、決して見えないゴールに向かって走っている人にも似ていた。

そんな男も、やがて老い、死の床につくときが来た。老衰ではあったが、平均寿命よりずいぶん若くしてのことだ。枕元には、男を惜しむ人々が集まった。

「早すぎる」

誰かが言った。

「いや、遅すぎた」

男が呟いた。誰にも聞こえないほど小さく。

かつて、男が青年だった頃。男は友のために、それまで出したことがなかった全力を以て走り、友を救おうとしたことがあった。

だが、間に合わなかった。その友と言葉を交わす機会は永久に失われた。

それ以来、男は走り続けてきたのだ。一度も緩めず、一度も止まらず。

「死なないでくれよ」

「あなた、待って頂戴」

枕元で、人々が嘆く。

「……ほつといてくれ」

男はしかめた目を天井の一点に向け、ぎりりと歯を食いしばった。「私は死に急いでるんだ」

それからふいに、全身の力を緩めたと見ると、急に幸せそうな微笑を浮かべた。集まった全員が、「ああ、やっと止まれたのだ」と気づく。

勿論、このとき男は息を引き取っていたのである。

1 . r u s h (後書キ)

「急いで行く、」

「急いでする、」

「急ぎ、」

「突進」

2・stress

古い建物の最後の軋み。ビルから飛び降りる者の無意識の悲鳴。そんな音だった。

街の音が轟めく大通りの最も騒がしい一角で、男は叫ぶようにバイオリンを弾いていた。道行く人は、その「声」にぎよっとして立ち止まり、しばらくすると不快げな顔つきで去って行く。

男は弾き続け、バイオリンは叫び続けた。誰も喜んでくれないのには慣れていた。今日は、自分達だけのために弾いているのだ。

自分達への、葬送として。

誰も悪くなんてない。運がなかったただけだ。だが、故に苦しみは深かった。技術は求められる以上に磨いたし、楽器も最良の状態を保つべく扱った。有用と思つたアドバイスも全て受け入れた。

だが、彼らの音は変わらなかつた。誰も笑つてくれない。褒めてくれない。拍手の一つもない。おまけに、演奏者自身までが澱が溜まるように不快な思いを募らせてしまう。

弾くべく育てられてきたのに。

弾かれるべく作られたのに。

そうして、限界点が彼らの最期を決めた。

もつと強く、もつともつと強く。血溜まりの中で吼えるように。

さらに速く、腕がちぎれるほど速く。奈落の底へ落ちるように、太陽の中へ駆けていくように。

絶叫するような音色が高ぶってゆく。人々は皆足を止め、遠ざかる。最早その一角は、男の独壇場だった。生まれ出て以来磨き続けた技術の全てを凝縮した演奏が、しかし美しいなどは口が裂けても言えない音色で、無人の輪を作りだしている。

弦と弓が激しく擦れあって、互いに罵声を上げて。否、怒号、絶

叫、嬌声、哄笑。弾け飛ぶ感情。

男は苦痛とも快樂とも知れぬ情動の高ぶりに、鬼のように顔を歪めていた。全身から汗が噴き出し、体だけが正確に動き続けている。耳鳴り。破壊。落下。地獄のような終わらない爆音の中で、男の口がふと、何事かを囁いた。すぐに掻き消されて、彼の楽器以外の誰にも気付かれはしなかったが。

誰かが、柔らかに微笑んだ。

ふいに世界から音が消える。平和な世界だ。何も無い世界。器は消え、そこに澱む何物も存在しない。そして

弦が、細い音を奏で、寸断された。

瞬間、誰もが振り向いた。音の発生源を探すが、見つからない。怪訝な顔をして、しかしどこか晴れ晴れとして、街は再び動き出した。

男が居たはずの一角には、もう何もなかった。

2・stress(後書き)

「」を強調する「、

緊張「、

「ストレス」、

「強調」。

3 . a t t r a c t

まず、食卓に山盛りの料理が並んだ。湯気を立てるまるやかなクリームシチュー、ミートソースがたっぷり掛かったスパゲティ、オリーブオイルの滴がきらきらと光る瑞々しいサラダ。テーブルの中央では、こんがりキツネ色に焼けた肉の塊が花びらの如く美しく添えられたレモンの輪切りに引き立てられている。

と、テーブルの横をしゃなりと赤いイブニングドレスの女が通りかかった。ボウイの差し出したワイングラスをひとつ、飴細工のような指で取ると、朱に塗れた唇でちよいと舐める。空いた左手が、挑発するように首筋から胸元へ滑り落ちた。

女が睫毛の影を濃く落として俯くと、その足下には可愛らしい子猫が遊んでいる。よく手入れされたふわふわの毛並を、小さな舌で懸命に毛繕いしていた。と、誰かの足に踏まれそうになり、弾かれたように飛び退くと、女の足元で健気に敵の方を睨んでいる。しばらくすると安心したのか、高級絨毯の上で気持ちよさそうにごろごろやりはじめた。

その時ふいに室内がざわついて、設えられた壇上に一点の宝飾品が登場した。見事な冠である。中心に嵌め込まれた巨大なサファイアを小粒のダイヤが取り囲み、ぐるりには大小様々な宝石がやや控えめにあしらわれている。全体の造形には最高級の彫金や象嵌が用いられており、贅沢でありながら決して華美ではない、威厳ある逸品だ。

人々が見惚れて溜息をついていると、突然、天窓が割れる凄まじい音がした。パニックが広がる中、華麗なロープワークで降りて来たのは、黒い衣装に身を包んだ背の高い男だった。男は洗練された素早さで冠に近付くと、逞しい腕でそれをそっと抱えこむ。そして、襲い掛かる護衛達を鋭い体術でひと捻りにし、マスクの隙間から愉快そうな目で一瞥すると、颯爽と去ろうとした。

が、唐突な銃声によってそれは阻まれた。何十何百という銃弾が、男の体に打ち込まれる。会場にいた人々も容赦なく打ち抜かれた。外から窓を割って、武装した兵士たちがなだれ込んでくる。人々は悲鳴を上げて逃げまどった。足を撃たれ、腕を吹き飛ばされ、脳を削られ、会場が阿鼻叫喚に包まれる。先程まで笑っていた人間が、血まみれで床を這いずり獣のような呻きをあげ、兵士たちは彼らの頭をひとつひとつ丁寧に撃ち抜いていった。

やがて月日が経つと、そこは廃墟として忘れられ無人の野となった。春になると草木が芽吹き、色とりどりの花を咲かせる。白い花、赤い花、青い花。空には雲雀が鳴き、水色の風が清々しい空気を運んで吹き抜ける。背の高い叢が揺れて、緑の波を立てる。

食物、女、生き物、宝石、義賊、戦争、大自然。さて

「くだらね」
ブツン。

テレビの電源を切ると、少年は立ち上がり、天井から吊した輪に頭を通して足元の台を蹴った。

苦痛が襲い、思わずばたばたともがく。耳鳴り、激しい頭痛、痺れ、吐き気。視界をわけのわからない模様が点滅しながら塗り潰していく。脳みその端っこにあちこち明滅していた思考がやがて堪えかねたように次々と消え、本能的な恐怖の中に一抹の、何か吹っ切れたようなものが遠くから自分を見ていた。

それがなくなると、あとは何もない。真っ暗闇だ。上下左右前後自分も自分でないものもないただの闇だ。闇であると認識する自分すらいない。何もないところ、最後に行きつく場所。

食物、女、生き物、宝石、義賊、戦争、大自然、死、無。さて、何が一番好きですか？

3・attract(後書き)

「を引きつける、
魅惑する」。

4・rely

「大丈夫だ、心配するな」

男は力強く言って、女を抱きしめた。白いものが混じり始めた口髭の下には、穏やかな微笑が浮かんでいる。

二人がどのくらい一緒にいるのか、もう本人たちにも分からない。数えるには長すぎるし、出会ったときはまだ、二人とも子供だった。女はいつでも、男の後をついていった。遊びの時も、喧嘩した後も、ゴロツキ連中や兵隊から逃げるときも。

男はいつでも、女の視線を意識して動いた。食事のときも、身を寄せて眠るときも、一緒に剣を取って戦場に出るときも。

男はしばしば、体を張って女を庇った。そうして怪我を負った男を、女はなりふり構わず助けた。

女は初めの頃、看病するハメになるたび青ざめて唇を噛んでいたものだが、やがて微笑みを浮かべるようになっていった。男もやがて、ぶすつとして呻き声をこらえるのではなく、冗談混じりに泣き言を言うようになった。

二人とも、あまり真面目に話したり、気持ちを伝えたりはしなかった。それでも息の合った彼らを、戦場の仲間たちは「おしどり夫婦」とからかった。

戦争は次第に激しくなっていたが、二人はいつも笑っていた。何も言わなくても、互いのことは理解している。

だが、ある日。男は初めて、女の気持ちを聞いてしまったのだ。

酷い天気の後だった。あたり一面が騒がしく、獣のような殺気がこだましていた。肉の塊がそこら中に転がり、流れ出したもので

足元はぬかるんでいた。その中に二人は、互いの四肢を絡め合うようにして立っていたのだ。

女は男の腕の中で弱々しく笑った。男は何か抵抗するように口を開いたが、どんな言葉も声も、喉を震わせはしなかった。

やがて女は、閉じかけた瞼の間に残った眼光を、渾身の力で男に叩きつけ、静かに、

「信じてるわ」

そう、一言だけ、口に出した。突然腕が重くなり、男はその場に座り込む。怒号が飛び違い、矢の雨が降り注ぐ戦場で、男はいつまでも女をかき抱いていた。

男は女を離し、もう一度微笑みかける。

信じてるわ。あなたは、決して

「分かってるよ」

少し面倒らしく答えて、男は背を向け、独り歩き出した。

4・rely(後書き)

「Aを信頼する」
「Aに頼る」
「Aに頼る」

5・respond

A男「やあ」

B子「傘持つてる?」

A男「着替えが欲しいな。入っていい?」

B子「面白い番組無くて」

A男「酷い雨だ。外出なんてしないほうがいい」

B子「救急車だわ。最近よく聞くみたい」

A男「また痩せたよ、体重が凄いぜ。何キロだと思っ?」

B子「また蒟蒻畑でも詰まらせたかな。ダイエット食品とかさ、馬鹿みたいよね」

A男「セーターあつたかいな。汚したらごめんよ。まあ、君は気にしないかな」

B子「本当に痩せたいなら食っては吐いてとか、食わないとか、すればいいものね」

A男「大体、汚すとか汚さないとか気にしてるからストレス溜まっちゃうんだよ」

B子「他人の目なんかいいから、好きな自分でいられたら幸せなのに」

A男・B子「だから苦しむ羽目になるんだ」

A男「……」

B子「……」

A男「君、最近仕事行ってないんだっ?」

B子「そういえば、あなたの好きな映画監督、亡くなったのね」

A男「僕の上司がウワバミでね。こないだ四件ハシゴしたときは死ぬかと思っただよ」

B子「さっきテレビで言っただけけど、大変みたいね、作りかけ

の作品があつたつて」

A男「肝臓は大事にしなきゃ駄目だよ。まあ、未来がある人の話だけど」

B子「夢と現実の境界だなんてあなたの好きそうな話。生死の境界も似たようなものかしら。監督もそれを見たかしら」

A男「健康も最近じゃステータスだからね。口が達者じゃない奴は体力と活発な印象で勝負つてわけ」

B子「僕は僕の見たものをスクリーンに映す映写機だ。…違うな、でも似たようなセリフ。誰が言ったんだっけ？」

A男「いい奴だつて思わせるのは別にいいと思うけどさ。そう、分かつて嘘つくのはいいんだよ。厄介なのは、気付いたら引き返せない、無意識の嘘だ」

B子「彼らつて、自分の口や文字じゃ上手く伝えられない人種なのかしら。伝えたいことが映像でなきゃ上手く描けないのかしら」

A男「イメージと記号で世の中成り立つてるんだよ。誰も本質なんか見ようとしない。本質がどこにあるのか、そもそも存在するのかも分からない」

B子「けど、映像は嘘をつけるわ。沢山の表象を操作して、彼らはテーマを描き出す。けれどやっぱり、情報の中の情報は多すぎて多様すぎて、フィルターなしには整理できない。見る側がそうやって見つけたテーマは…誰が、そこに導いたの？」

A男「僕は僕のこと、君のこと、他の知り合いも嫌いじゃない。だけど世の中が歪んでるのは誰のせいなんだ？ 大好きな一人一人が、例えばニュースひとつで幽霊みたいに隊列を組んで踊り出す」

B子「本当も嘘もない。夢も現実も、生も死も。だから映画の物語がフィクションかどうかなんて些細な問題。自分がどこにいるか分かかってれば、それでいいのよ」

A男「全部まやかした」

B子「それが真実よ」

A男「……」

B子「……」

A男「君はもう、飽きたの？ それとも絶望した？」

B子「そろそろ静かになったかしら。前のアパートの人、夜遅いから」

A男「正直、君が何考えてるのか分かった試しがないよ」

B子「どう、そのセーター。結構着心地いいでしょ」

A男「あ、道具買ってきてただけで無駄足だったかな。準備済んでる」

B子「やっぱり出来るだけ快適でなくちゃ。別に悲劇気取りたいわけでも、自棄でもないんだから」

A男「不思議だな。何もかも捨てちまったのかな。心構えなんて沸いてこないや」

B子「はい、あなたの分」

A男「年寄りになるのが怖かったんだ。世の中の仕組みを諦めちゃいそうだし」

B子「一応聞くけど、本当に納得してる？」

A男「でも君は本当に今止めていいの？」

A男・B子「うん、勿論」

「Aに反する」
Aに反する、
Aに回答する、
Aに回答する、

5. respond (後書き)

6・threaten

ある女性の元に、一本の電話が舞い込んだ。

「大事な物を預かっている。金庫の中身を持ってひとりまで来い」

女性はすぐさま準備をし、家を飛び出した。車を持っていないので、ヒールを履いた足で懸命に走った。

途中にある橋に差し掛かった所で、不意に誰かに呼び止められた。女性は反射的に振り返り、その拍子に転んでしまった。

「大丈夫っ？ どうしたの、そんなに急いで」

心配そうに駆け寄ってきたのは、職場の同僚だった。

「ちよっと待ち合わせで」

女性はそれだけ言って立ち上がったが、ヒールが折れていたために再びバランスを崩した。懐に入れていたものがこぼれ落ちる。

同僚はそれを拾い、目を丸くした。

「どうしたの、これ」

「人に渡さなきゃいけないくて、早く行きたいの」

「そう……でもそんなに急いで、こんな風に持ち歩いて……騙されてるとかじゃないよね」

「大丈夫」

「……誰なの？」

「さあね」

「もしかして、××？ だったら止めた方がいいよ、あいつはね」
同僚の表情を一瞬見て、女性は焦りを隠さずその手のものをひったくった。

ヒールを脱いで片手にぶら下げ、一心に駆け出した女性を、同僚は軽く腕を組んで見送ったのだった。

指定したビルの前で、男はひっきりなしに時計を見ながら貧乏揺すりをしていた。

と、男の携帯電話が鳴る。

「もしもし」

『私です』

「ああ。持ってきたか？」

『はい。でもその前にひとつ』

「何？」

『約束してくれますか？ これを渡したら、そのあと絶対に裏切らないって』

「……もちろん」

『もし詐欺だったら許しませんよ』

「俺は嘘つきじゃないよ」

『わかってます』

女性の努めて冷静な返事の後、くしゃり、と紙切れが握りつぶされるような音がした。

『わかってますよ。「浮気はしてない」なんて、あなた言ったことありませんもんね。もし言ったら、私は嘘つきに罰を与えなきゃなりませんから』

男は滑り落ちそうになる携帯を必死に握り締め、やっとのことで、幸せにするよと応えた。

6・threaten(後書き)

「」を脅迫する、「、

」をおどす、「、

」をおびやかす「。

私には養子がいる。この春我が社に入社してきた、二十二の若者だ。特にこれといって特長のない、真面目そうな青年である。

彼の採用には、私の述べた意見が大きく影響している。私は自分のために、人事の心証を操作したのだ。もちろん、最大限注意を払った上でのことだから、バレてはいない。そうして、彼が入社する前に、私達二人以外には気付かれないよう養子縁組を済ませてしまったのだ。

彼は、私の幼なじみだった。ごく近所に住んでいた仲だ。

といつても、年の差は八つもある。私が中学生の時分、小学校に入りたてだった彼をよく世話していたものだ。彼は私を

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

といつてよく慕い、私もそれを喜んだ。私達は互いに学校では大人しいタイプだったため、二人でいる放課後が最も奔放になれる時だった。

私達の関係は数年に渡って続き、その間、二人で本を読んだり、映画を見たり、様々な場所に忍び込んだりして遊んだ。思春期真っ盛りだった私は、彼にキスしてみたり、性的なイタズラを仕掛けたこともあった。

「お姉ちゃんがお母さんだったらよかった」

と、彼はしばしば口にした。何らかの家庭の事情があったのだろうか、深くは追求せず、私はただ喜んだ。実際、当時の二人には家族以上の絆があったのかもしれない。

その後、進学で遠方に引っ越し、彼とは十年以上も連絡すら取り合っていないかった。

だが、彼はすっかりと私を覚えていてくれた。息子になってくれ

と言ったら快く引き受けてくれ、今では社宅ではなく、私のマンションに同居している。

大学時代も、社会人になってからも私はひとりの男とうまくいったことがなかったが、彼とはまるで最初から家族だったかのように何かと息が合った。家ばかりではなく会社でも、彼のチームが私の傘下になったときは成績が上がっていた。

そんな公私共に充実した日々は、濃密ながらもあっという間に過ぎていった。

私が突然の悪阻に見回れたのは、養子縁組からおよそ一年が過ぎた頃のことだ。私達は法的には親子でも、実際にはそれ以上の愛情を互いに抱いていたため、男女の関係になるのは割合に早かった。その結果、不思議なことに、私の中に息子によって息子が宿されたのである。

私は嬉々として、それを彼に報告した。

「良かったね」

と彼は言い、私以上に喜んでくれた。

胎児は問題なく成長し、私の腹は日を追う毎に目立つようになっていった。流石に社内でも隠しきれなくなったため、「恋人の子」と言うて産休を取ることにした。

彼は毎日帰ってきては、何かと私を気遣ってくれた。そうこうするうちに臨月を迎え、ある日ふと、彼に訪ねてみた。

「ねえ、この子ってあなたにとっては何なのかな」

今まで特に気にしてもいなかったことで、雑談の延長に出た質問だった。彼にとってこの子は、娘なのか、それとも妹になるのだろうか。

彼は言った。

「何でもいいよ、そんなの。僕達にはそんな記号必要ないでしょ」
それから穏やかに微笑み、膨らんだお腹にキスをした。布越しなのに、彼の濡れた唇の感触が伝わってくる。

彼は今までで最も優しい手つきで、腹の向こうの胎児を撫でた。ふと、この一年表に出てこなかった疑問が沸いてくる。

微笑みを返すことで無理矢理それを打ち消した。しかし、不安は霧のように胸中にわだかまったままだ。

彼は、私のことをなんと呼んでいただろうか？

腹の中の子が蠢き、まるで父に 兄に 男に、キスを返したような気がした。

7・adopt(後書き)

「」を採用する「、」
「」を養子にする「。」。

彼女は接客業には向かないんじゃないか、と俺は常々思っていた。新顔の客に対しては常に鉄仮面だし、常連にだつてめつたに微笑みすら漏らさない。注文を訊くとき以外はほとんど口を開かず、隙なく完成されたカクテルを音もなく目の前に差し出しては客をたじたじさせる。

そんな彼女が唯一饒舌になるのが、怪談を語って聞かせる時だつた。深夜、客が一人か二人しかいなくなつて時間がなくなつたようになる、彼女はシェーカーをある一定の速さで振りながら、おもむろに口を開くのだ。

彼女の低く澄んだ声は、薄暗い店内によく溶けた。そんな独壇場で、赤ん坊の声だの消える男だのという話は妙に真に迫つて聞こえ、そいつに運悪く出くわした客は震え上がったものだ。もちろん、俺も例外ではない。

静まり返つた店内に、シャカシャカ、と聞き覚えのあるリズムが響くと、俺はどんなに酔つていても反射的に緊張した。不思議と止めることはできず、彼女の声はするりと耳に侵入してきてしまう。

酔いも醒めるような寒気を味わつたら、それが引き上げ時だ。青ざめて席を立つ男達を、彼女はいつもの無表情で、けれど少し勘定をサービスして送り出してくれるのだった。

ある夜。

その日も俺は怪談を聞かされて、あんまり怖くて思わずブランデーを一気飲みしたら、珍しく彼女がちよつと微笑んだからフト訊いてみた。

「ねえ、どうして怖い話するんだい？ ホラーとか好きなの？」

途端、彼女はよそよそしい鉄仮面に戻つた。俺はとっさに、しま

った、と思い、

「いや、いや。今日はこれで帰るね」

勘定を済ませて、帰ろうとした。と、

「あの」

声がかかった。俺は思わず振り向いた、彼女が直接用件を切り出さないなんて初めてだったからだ。

「……何？」

「……いえ。ありがとうございました」

それだけだった。どうやらそれ以上話す気はなさそうだったので、俺は諦めて背を向けた。

それからしばらく彼女の怪談を聞くことはなくなっていたが、ある夜久々に遅くまで飲んでいると、彼女がおもむろにシエーカーを取り上げる音がした。

シヤカシヤカシヤカ。

シヤカシヤカシヤカ。

久しぶりの緊張を味わう俺の耳に、随分長い間、シエーカーの音は響き続けた。

シヤカシヤカ、シヤカ。

シヤカ。シヤカシヤカ。

おや、と俺は怪訝に思って顔を上げ、すぐにまた伏せた。

見なきゃよかった。

シヤカ、シヤカ。シヤカシヤツ……。

彼女の胸元に、一つ二つ、雫が落ちるのが視界の端に映った。

「私、ここをやめるんです」

俺のいつもと違う緊張に気付いたのかどうか、彼女がいつもの低い声でそう言った。俺は俯いたまま答える。

「そうなんだ」

「はい。だから練習しなきゃいけないんです。私、ちゃんと笑えますか？」

俺は答えなかった。彼女は、完成したカクテルを出さなかった。これはいつものことだ。怪談が終わると、俺はカウンターに何も出てこないのを不思議に思うこともなく、いつも帰路についていた。あれは、どんなカクテルだったんだろう。彼女はどんな顔をして、独りそれを味わっていたのだろう。

今夜は　俺は、どうしようか。

グラスに添えた指は、不格好な形のまま微動だにしてくれなかった。

8・shake(後書き)

「」を振る「」、

「震える」」、

「」を動揺させる「

「絶対に家を汚さないですよ」

彼女の厳しい口調を聞いて、僕は素直に頷いた。彼女の綺麗好きは昔からのことだし、こちらとしても、ようやくできた二人の愛の巣をわざわざ汚したくはない。

苦勞してやっと手に入れた一戸建てだ。彼女だって、「前のアパートはぼろだったから嬉しい」と喜んでくれたのだ。

しかし、始まってみると、新生活は思ったほどうまくはいかなかった。彼女はいつも落ち着かず、用事もないのに立ち歩くかと思うと、不必要に掃除をして回ったりする。夜の生活も興が乗らない様子で、途中でやめにしたり最中にぼんやりしたりといったことが続いた。

最初こそ、環境が変わったせいだろうと気に留めなかったが、二月三月と経つても調子は良くなならない。僕は、再びの別居すら考え始めていた。

そんなときだ。

折り良くといていいのか、僕がすっかり、襖に穴をあけてしまふという事件が起きた。

彼女は案の定大激怒で、二時間も怒鳴り続けた挙げ句今度は話しかけても返事をしなくなり、とうとう一言も交わさないまま別々の部屋で寝ることになった。

これで同居も終わりか。そう思うと、僕はなかなか眠れなかった。それでも強いて目を瞑り、努力して、何時間かが空しく過ぎていった。

かたり、と襖の開く音がした。彼女が出てきたらしい。懐中電灯で僕が開けた穴を照らし、しゃがんでのぞき込んでいる。

眠れないほど気になるのだろうか。

熟睡しているふりをして様子を窺っていると、何やら、押し殺し

た息遣いが聞こえてきた。えっ、と思う。呼吸音が、洩らさないようににはしているが次第に荒くなっている。心なしか、何だか色っぽい。

「何してるんだ？」

そつと近付いて話しかけると、ひっ、と声を上げて彼女が振り向いた。灯りに半分照らされた頬が赤くなっている。

「き……聞いてた？」

「何を？」

わざと尋ね返すと、彼女は今度こそ真っ赤になって俯いた。それから、ぽつりぽつりと告白を始める。

要するに、襦の穴を見て興奮していたということらしい。シミひとつ無い家の中にできた、大きな傷みに、なんだか風穴があいたような気分になったという。

僕にも分かる気がした。正直、この家の息詰まる清潔さにはうんざりしていたのだ。

「そっか」

とだけ言つて、僕はいきなり、拳で襦を破った。彼女が「いやっ」と甘い声をあげる。

「ぱりっ。」

「だめっ」

「ぱりっ。」

「やめてっ」

激しく僕の足にすがりつきながら、彼女は瞳を濡らしていた。

もつとだ。もつと壊してしまえ。家なんか直せばいいんだ。そうだ、すっかり改修してしまおう。

「ばきばきっ。」

「ああんっ」

僕はたまらず、彼女に飛びかかった。

翌朝。

半壊した建て売り住宅の下から、金槌だの鋸だのを持って折り重なるように倒れた、裸体の男女が見つかったという。

9 · hurt (後書き)

「
」を傷つける、
痛む「

「いや、今日の演説も素晴らしかったですよ！ やはり先生のお言葉には、民の心をつかむカリスマ性が……」

ひっきりなしに議員を誉めたたえながら、秘書は飲み物とハンカチを差し出した。横柄な仕草でそれを受け取った議員が、額の汗を拭いてフン、と鼻息を吐く。

「あのくらは当然だよ。なにせ、私はこの腐った国を根元から変革する気構えなのだからね」

「『国家の手術』……ですね」

議員の著書のタイトルを挙げると、ますます鼻息を荒くして、

「そうだとも。私には医者のような技術はないが、弁舌と知識、そして人間力がある。民衆の支持を得られるということは、今日の

滑りがよくなった舌の動きを眺めながら、また始まった、と秘書はひそかに溜息をついた。

そもそも、議員が全国で知られるまでにのし上がったのは、秘書の助けがあったからこそである。知識を付けるための文献やその他情報源を用意し、金をかき集めて各方面へのコネをつなぎ、分単位のスケジュール調整をする。それもこれも、全ては議員への恩返しのためであるということとは、秘書のプライベートな知人なら誰でも知っていた。

というのも、秘書の現在の仕事と収入は、議員のある気まぐれが無ければ成立しなかったものであるからだ。

数年前、国立大学の医学部を卒業した秘書は、不祥事から医局を追い出され、開業する資金もなく路頭に迷っていた。その秘書を、親戚筋からの遠いつながりで、偶然顔を合わせた時に「気に入った」と雇ったのが、議員なのである。

秘書の仕事に就くと、専門外の仕事もすぐに覚え、議員の活動を全面的にバックアップするとともに健康面での管理も完璧にこなした。医学の知識があるために、あまり知られたくない体調不良もすべて内部で解決することができると。一度など、脳血栓を起こした議員を、手ずから手術して回復させたこともある。

「君がいなければ、私は今頃死んでいただろうねえ」

議員はよくそう言って笑っていた。秘書は、黙って笑い返すのが常だった。自分の仕事は、議員が世間や敵に向ける顔を完璧に化粧してやることであつて、自分を誉めてもらうことではない。日頃、秘書はそう考えて仕事をしてきたのだ。

そして、その仕事は大抵思惑通りに実を結んだ。

仕事が一段落した後は、手術のアフターケアやその他療法などを行いつつながら、議員の自室で二人で過ごすのが習慣になっていた。秘書の処方した薬を飲みながら、ある日議員が言ったものだ。

「不思議なものだよ。確かに私には人間力はある。勝てる力があると自負しているが、君の推論がこうまで当たるのはねえ。まるで天才だね、君の推理力は」

「いえ、私は議員の胸をお借りして、自分の仕事をしているだけです。議員のお力があれば、戦局を操作することなど造作もありませんよ」

あくまで謙虚に、秘書はそう言った。議員はけろりと、そんなものかな、と納得し、その様子に秘書はにこりと、少し誇らしげに笑つて見せたのである。

決定的な選挙の、当日。

議員は秘書が想定した通りの票数を獲得し、見事当選した。

「おめでとございます」

「うむ、ありがとう。やはり君は大したものだな」

「いえ、私など。……楽しみですね、議員。これからあなたの手で、

国が変わってゆくんですね」

「その通りだ。大手術が始まるぞ。君には、特等席でそれを見せてやるぞ」

秘書はほほ笑んだ。

「いえ。それには及びません」

議員が妙な顔をした。

「なんだね？ 君、遠慮が過ぎるぞ」

「そうではなく……見せていただくには及びません、と申し上げたのです。私は自ら、国の変革を見にここまで来たのですから」

議員は一瞬あつげにとられ、それから愉快そうに、声をあげて笑った。

「そうかそうか。君もなかなかの野心家ではないか」

「ええ、あなたの秘書ですから」

言いながら、秘書はいつものように、議員の飲み物に二粒の薬剤を混入した。脳の働きをコントロールする薬だ。脳血栓の手術の日から、密かに投与し続けている。

「私の仕掛けも、そろそろ芽吹く頃です」

議員は、秘書が想定した通りの笑みを浮かべた。

10・operate(後書き)

「作動する」、

「」を操作する「、

「手術する」。

「ああこら、危ないぞ」

娘がテーブルを揺らし、今にも上の皿が落ちそうになっているのを見て、私は慌てて制止した。

「全く……めっ。やっぱり延ばしすぎたな」

胸にくくりつけた紐の長さを調節する。根元は屋内の高い位置に固定してあるから、万が一にも娘がほくくことはない。

こうして、娘のしつけに合わせ、次第に行動範囲を広げてやるのだ。

私の方針は変わっている、とよく言われる。可愛いそうとか、もつと自由にさせてやれ、とか。しかし安全のためにはこのやりかたが一番なのだ。私は一人暮らしだから、どうしても目を離す時間が出来てしまうし、家の中を娘のために片付けたり移動するのも面倒である。

それに、何も無理に締め付けているわけではない。ゆったりした服の上から、自分では外せない程度にくくってあるだけなのだ。問題があるとすれば、社会道徳的な……つまり、見た目がアレだという点だけである。

「さてと、これでよし」

紐を縮めると、娘は動ける範囲が狭まったのに気付いてか、「アーウー」と不満の声を上げた。

「だーめ。お前が怪我したら大変だろ？ パパ忙しいから、病院にも連れて行ってあげられないんだぞ」

またしても不満の声。そこでちよつと手を振り上げて見せると、すぐに身を縮めて大人しくなった。賢い娘なのだ。

「……ウーウー」

「はいはい、ご飯かな？ もうちよつと我慢だよ、晩ご飯の時間はまだだからね」

控えめな主張には優しく答えてやる。すると素直に頷いて、ひとりでボールなどと戯れていたりする。

無邪気な様子を微笑ましく眺めていると、玄関の呼び鈴が鳴った。「はい」

「ご主人でいらつしやいますか。こういった者です」

突然の来客が懐から取り出したのは、警察手帳だった。

「はあ……何かあつたんですか」

「ええ、女子高生が一人、行方不明でしてね。最後に目撃されたのがこの近辺なので、一帯でお話を伺ってるんです。この写真の娘なんです」

私は一瞥して、おや、と思った。

「私の娘にそっくりですね」

刑事が目を見上げた。

「ほう？」

「瓜二つだなあ。いやあ、びっくりしましたよ」

しきりに驚く私を、刑事はやたらじろじろと見始めた。

「……何です？」

「娘さんとはご一緒にお住まいで？」

「ええ、何でしたら呼びましょうか？　おーい！」

私は奥に向かって呼びかけた。娘の行動範囲は玄関まで広げてはいなかったが、廊下に出てくるまでなら出来るはずだ。それに、あらゆる疑いをかけられて少し腹が立つてもいた。

「アウー」

小さな返事が聞こえて、娘が廊下に這い込んできた。

「刑事さん、あれがうちの娘です。挨拶が出来なくて申し訳……」

「アアー！　アウウウー！」

突然私の言葉を遮り、娘が叫びだした。驚いて見ると、廊下を激しく叩きながらこちらに来ようともがいている。暴れたあまり襖が外れ、倒れてしまった。

いったいどうしたというのだろう。刑事の顔を見て不安になった

のだろうか。

「すみません刑事さん、なんだか興奮してるみたいで……」

「あなた、何をしてるんだ！」

言い終わらない内に、今度は刑事が怒鳴りだした。

「このイカレ野郎、現行犯逮捕だっ」

「ちょ、ちよつと待って下さいよ。あれは私の娘……」

「あなた独身だろう、養子もいない、調べはついてるんだ」

わけのわからないことを言い、刑事はずかすかと廊下に踏み込んできた。止める間もなく娘に襲いかかり、安全紐や手袋を外してしまふ。

「おい何するんだ、人の娘に……」

「クソ野郎！ 死ぬ、変態親父！」

甲高い声が耳を打った。娘の声だ。娘が喋っている。口の中を噛まないようにと含ませておいた特製のボールを、刑事が勝手に外したのだ。

かっ頭と頭に血が上った。

「やめろ、娘を元に戻せ！ その子は私が世話してやらないといけないんだぞ、まだ家の外に出たこともないんだ！ お前みたいな無茶な連中がいる世間は、害なんだ！ 危険なんだっ」

刑事は黙ってこちらを睨んでいる。娘はあろうことが、刑事にとりすがって泣きじゃくっている。

「どうしたんだい？ ほら、パパのところ……」

「この子はあなたの娘じゃない」

刑事が自分の薄汚いジャケットを脱いで、娘に羽織らせた。

「この子を閉じ込める権利は、あなたにはない。閉じ込められるのはあなたの方だ」

私は混乱していた。写真の娘が私の娘だと刑事は考えている。ならば娘は、外の世界を知っているのか？ 娘は、私以外の男を知っているというのか？

「死ぬ！」

再び、娘が叫んだ。私は背後から、複数の人間に捕まえられていた。

ああ、そうか。

私は娘に縛られていたんだな。私はこれから、私自身の生き方を広げて行かなくてはならないんだな……。

「そうだよ、刑務所の中からな」

いつのまにか口に出していたらしい。後ろから、誰かが親切に返事をしてくれた。

11・extend(後書き)

「」を広げる、「」
「」を延長する、「」
「」広がる、「」
「」延びる。「」。

あるところに、説得が得意な男がいた。男は旅をしながら、心に問題を抱える人々を言葉一つで救って回ることを生業にしていた。男の説得は謙虚で誠実だというので、出会った人々の評判はいつも上々だった。

そんな男が、小さな村にさしかかって、ひとつの噂を聞いた。なんでも村に住んでいるある少年が、とんでもなく無責任だというのである。間違いを起こしては責任逃れに邁進し、自分に何か悪いことが起これば人のせいにし、それどころか、村にふりかかった災害すら無関係な誰かのせいにするというのだ。

男は、すぐさま少年の説得に向かうことにした。少なくとも心構えの上で、常にまっとうに生きようとしている男にとって、負うべき責任を放棄する人間というのは放っておけない存在であった。

「こんにちは。君が噂の少年ですね」

「……はあ。誰すか、あんた」

少年はあからさまにぞんざいな態度で応じた。どうやら警戒しているのか、それともただ面倒なのか、その後男が様々な質問を重ねようとも、柳に風でいつまでも会話が成立しない。そんなことをしているうちに、とうとう夕方になってしまった。

これは強敵だぞ、と男は腹をくくり直し、その日は引き下がることにした。

その夜、宿に戻って少年について尋ねて回った男は、多くの村人から意外な言葉を聞いた。少年を放っておけ、というのである。

「でも、あの態度はあなた方にとっても、彼にとっても良くありませんよ」

「いやあ、もう我々はあれでいいと思ってますから。仕事をしないわけじゃあないし、何かひどい害が出るなら別だけどねえ」

「そんな馬鹿な！ あなた方は彼のいい加減な態度に感化されてい

るのじゃありませんか」

男は村人たちにも、その場での説得を試みたが、誰もかれも困ったような顔をするだけで、暗に迷惑だということ態度で示している。とはいえ、男にとってはいつものことである。これから時間をかけて説得していこう、と腹を据えた。

翌日以降、男は本格的な説得に乗り出した。

仕事休みの時間帯から少年の家に出かけて行き、午後は彼の仕事を手伝いながら、ひっきりなしに話しかけた。受け入れてもらえるようにと世間話もしたし、一緒にお茶をしたりもした。

最初は迷惑そうだった少年も、一週間もたつと次第に態度を和らげ、笑い話などもするようになった。評判が悪い割には少年の交友関係は広いらしく、しょっちゅう村人が訪ねてきたから、そんなときは男を交えての歓談で盛り上がることもあった。ただし、村人の方はまだ男への警戒心が強いようで、態度があまり軟化しないのが気がかりではあった。彼らの中には、「少年と二人で話したい」と言つて、どうやら男の言うことばかり聞かないようにと説得しているらしい者すらいたのだ。

それでも、男の滞在が長くなればなるほど、少年は心を開いていった。

あるとき少年がへまをして、男に怪我をさせそうになったとき、「ごめんなさい、僕のせいです」と申し訳なさそうに言った時、男は説得の成功を確信した。

「いやあ、よかったよかった。少年が心を入れ替えてくれて」

男は満面の笑みを浮かべ、説得成功の翌日、村をたつた。少年のせいで鬱屈した空気に染められていたであろう村人たちも、爽やかな心持で男を見送っているように思えた。

それから一年後。

偶然同じ村に通りがかった男は、村人たちの暮らしぶりに変化が訪れているのではないかと、懐かしさと期待に胸を膨らませて村を訪ねた。

が、何やら様子がおかしい。

天気の良い昼さがりだというのに、辺りには人っ子一人いない。人の声もほとんどしないし、仕事をしているのかいないのか、一部を除いては畑や家畜小屋も荒れ放題だ。男は不意に不安になり、近くの住居の門をたたいた。

「ごめんください、ごめんください！」

たつぷりと間をおいて、扉が緩慢に開かれる。陰鬱な顔をした老婆が隙間から様子をうかがっていた。そして、どうやら一年前に訪ねてきた男だ、と気づいたらしく。

「……あんたは……何をしに、またこんなところへ来たんだい！ 帰れ、帰っておくれ！」

すごい剣幕でまくしたてた。

男が困惑していると、庭先まで出てきて石ころをひつつかみ、細枝のような腕で男に投げつけ始める。

「ちよつと、えつ、やめてくださいっ」

「出ていけ！ 疫病神！」

老婆は必死の形相である。

「ちよ、ちよつと待つて下さい、私が何をしたっていうんです？」

それにこの村の様子は、一体何があつたんです」

「なんだつて？ これを見ても分からないっていいのかい！ この無責任男が」

それは、男にとってはずいぶんと心外な言葉だった。無責任、などといわれては引き下がれない。ひたすら追い出そうとする老婆をなんとかなだめすかしてワケを聞くと、この衰退の原因を見せてやる、といって、老婆は村の一角へ歩み出した。男はおや、と思つた。一年前、何度も通つた道。あの無責任少年の住まいへの道である。

本当に一体何があったのか……。

「お邪魔するよ」

扉をノックして、老婆は少年の家へ入った。

後に続いた男は仰天した。昼間だというのにカーテンを締め切った室内は真っ暗で、どれだけ放置しているのか、湿気と埃が充満している。狭い室内にはほとんど家具が無く、そして耳を澄ますと、隅の方からなにやらぶつぶつと呟く声が聞こえてきた。

急いで近づくと、案の定、あの時の少年である。しかしその姿は、すっかり変わってしまった。

肉は落ち、体が骨ばって、背は曲がっている。落ちくぼんだ目が虚ろに床を凝視している。

「いったいどうしたんだ？ 何を言っているんだ」

男の言葉にも反応しない。耳を近づけてみると、かろうじて、少年のつぶやきが理解できた。

「僕が悪い、僕のせいだ、僕は無能だ、僕のせいだ……」

男はぞっとした。

同じようなことを、少年はいつまでもつぶやき続けている。

言葉を失った男に、老婆が静かな怒りを込めて話しかけた。

「あんたが妙な説得とやらをしてから、この子はずっとこうなんだ。閉じこもって、自分が悪い自分が悪いって……おかげで皆もこの子に何も相談できなくなっちゃった」

「相談……？」

「気付かなかったのかい。この子はね、皆の心を楽にしてくれてたんだよ。そりゃあ、おおっぴらには言えなかったけどさ。誰だって自分のせいにはかりしてちゃあしんどいじゃないか。この村は、貧しい。天災だってなんかのせいにしまわないと、やってられないんだよ。……あんた、そんなこともわからないのかい」

男は、呆然として立ちすくんだ。老婆の言うようなことは、彼には、実感としては理解できなかったのだ。常に自分ひとりの力で旅をし、何が起こっても自分ひとりに責任を持たばよいだけ、という

生活をしてきた男は、「誰かのせいにならなければならないほどの絶望」など、長らく忘れていたのだった。

「そ……そんな」

「だから全部あなたのせいだって言ってるんだ。え？ 出ていきなよ、さつさと。でなけりゃ、お得意の説得でこの子を元に戻してみな」

「いや……だって、私は、正しいことを」

「何が正しいだい！ よそもんが勝手ばかり言いやがって」

男はへたり込んで頭を抱えた。

「違うんだ……私の、」

混乱しきって、男は口走った。

「私のせいじゃ……ない！ 私は悪くないんだ、私に責任はない、だって、知らなかったし、そんな……」

老婆の冷笑が聞こえた。

12・blame(後書き)

「」を非難する「、

」のせいにする「、

「非難「、

「責任」。

「俺は神になるんだ」

と男はいつも言っていた。少年はその聞き役で、いつも口には出さなかったが、男を嘘つきだと思っていた。

少年にも男にも、身寄りはない。街の片隅、薄暗い吹き溜まりでその日暮らしをしていた。それだから余計に少年は、神様だなんて信じられなかったのだ。なのに、男はいつもニコニコと夢物語を語って聞かせた。

具体的な計画があるわけではないようだった。ただ、神になる、とそれだけだ。少年は成長するにつれ、やはりそれは男の妄言にすぎないのだと確信していった。タダ同然の古着、ありあわせの端切れで作った家、一週間に一度の風呂。遠い異国の宗教では、神とあがめられる人物は生前そんな暮らしをしていたのだと聞いたことがある。皮肉な気持ちで少年はその話を思い出した。

ある雨の日。

少年は空腹で機嫌が悪かった。そこに男がやってきて、いつものように世間話を始めた。

「やあ、いい天気だな」

「おじさん、今日は仕事休み？」

「うん、今日はこのあと寝てるんだ」

「ふうん。神様って怠けものなのかい」

特に理由もなく、少年はそんな風に突っかった。男は少しびっくりした顔を見ると、

「さあね。神の仕事なんて俺は分からないさ。だってまだ神じゃないしね」

「いつなるんだよ、じゃあさ」

「今、準備を進めてるところなんだ。もうすぐ終わる。そしたらお別れだけだね」

あくまでにこやかな男に、少年はますます腹を立てた。

「どうやってなるんだよ。神なんて、死んでるか生きてるかも分かんないものにさ」

「それだよ」

男は嬉しそうに笑った。

「その曖昧さがいいんだな。曖昧で、皆がいいものだと思ってて。失敗がなくて誉められるだけなんて、最高じゃないか？」

何を言ってるんだこいつは、と少年は思い、眉をひそめて黙りこんだ。少し落胆もしていた。スケールの大きい夢物語だと思っていたが、まさかそんな下らない理由だったなんて。

それ以上口を利かなくなった少年の部屋から、男は静かに出て行った。

そうしてその日から、男の姿を見かけることはなくなった。

男の姿が消えた直後から、少しずつ不思議なことが起こり始めた。少年や仲間たちが目を覚ますと、一人一人の枕もとに札束が置いてあった。仕事場の監督役が妙に優しくなった。街が賑やかになり、道を歩く女たちは輝くような笑みを浮かべ、男たちは生き生きと働いている。誰の仕業かも分からず、個人や団体や果ては公共施設に有形無形の贈り物が届いていると連日ニュースが報道した。

「なんだか最近調子がいいな」

仲間の一人が言う。

「そうだな、あの札束のせいかなあ」

「あんなもんすぐ消えちまったじゃねえか」

少年は、ぼんやりとだが察しはついていた。あの男だ。男は長い年月をかけて、どうやったのか分からないが準備を進め、街の人々の願いをかなえてやったのだ。仲間たちもそれには気付いていなかった、ここから突然いなくなる人間などごまんという。実際、男のことなど誰もが忘れ始めていた。

結局、街の変化が誰の仕業かは誰も知らない。今のところは謎の慈善団体とか暇な金持ちの施しとか、いろいろ噂されている。だがそれにしても、やっていることが常識離れしすぎていた。実際、一晩やそこらでは簡単に実現できないようなことが多すぎるのだ。

そこが、男の狙い目なのだろう、と少年は考えている。

先日、少年たちの住まいに警察がやってきた。ごまんといるはずの失踪者のうちから、少年の知る男のことだけを聞きに来たのだ。身寄りもない、身元も分からない男の顔は曖昧である。少年が書いた似顔絵だけが、謎の男の手がかりとなる。

男はやがて、人々の噂の種となるだろう。謎めいた慈善者は、憧れや尊敬、やがて崇拜を勝ち取ることになる。そして生死も分からない存在だからこそ、美しい想像だけで男の像は構成されていくのだ。

（僕は、それに協力しろ、ってことか）

少年は初めて、男の話にわくわくし始めていた。

後日、警察の公開した似顔絵とともに、その事件は報道された。

『 銀行の支店を襲撃し、現金三千万を奪って逃走したとされる男の似顔絵が公表されました。容疑者である無職の男は特定の住居を持っておらず、本名は判明していないとのこと。また警察は、日未明に起こった「慈善」事件との関連を捜査しているとのことであり……』

13・consist(後書き)

(- of A) 「Aで構成されている」、

(- in A) 「Aに存在する」。

「あなた、ただのリング売りなのよね。そうでしょ？」

白雪姫はそう言つて、いたずらっぽく目を光らせる。魔女はマン
トの下でこっそり嫌な顔をした。

一番最初は櫛だった。櫛売りに化け、毒をしみこませた櫛で髪を
といてやり、瀕死に追い込んだ。だが、忌々しいこびと共が櫛を抜
いてしまい、毒が回りきらなかった。

二番目は紐にした。胴衣の紐売りに化け、試着を装って締め付け
る作戦だった。

だが、このとき白雪が妙な様子を見せた。そわそわと何かを期待
する目で、こちらを伺つたりあからさまに反らしたりしているのだ。

「……どうかしましたかえ、お客さん」

無視しかねて尋ねると、

「あら、なあんでもないのよ、紐・売り・さん」

とわざとらしい台詞である。強いて気にすまいと、何食わぬ顔で紐
を通していると、今度はその手を目を輝かせて観察している。どう
も気味が悪いので、もうひと息にやっってしまうことにした。

「ふん！」

力を込めると、白雪は「うっ」と呻いて倒れかけた。ここぞとば
かりに締めを締め上げ、よしとどめ、と思つたところで腕を掴まれ
た。

「あなた魔女ね？ 前に櫛売りに化けてた人でしょ」

あまりに冷静に言うので、締めきる前に思わず手を離してしまっ
た。白雪は深呼吸して息を整えると、がっかりと言つた風情で腰に
手を当てた。

もたもたしていると、もうこびと共が戻る時間だ 結局その場
は、諦めて退散した。

そして三度目。

魔女の作戦は、毒リンゴを食べさせることだった。

「お嬢さん、リンゴはいらんかえ」

よぼよぼの老婆を演じる様子を、白雪姫は好奇の目でじっと観察している。魔女の額に冷や汗が浮いた。

「……新鮮な美味しいリンゴだよ」

「ふうん。どう美味しいのかしら？ どこ産？」

「うっ……」

なんて意地の悪い娘だ、と魔女は恨みを募らせた。

「き、北の村でとれたての品でございます」

「ふうん。農薬とか使ってないの？」

「も、勿論無添加です」

「輸送手段は？」

「えー、あー、れ、冷蔵設備付きの馬車を使っております」

「へー。その業者信用できるの？」

「え、ええ！ 王宮付きの卸でございますゆえ」

言ってからハツとした。気付かれたか、と表情を盗み見る。白雪姫はにんまりと笑ったが、特には触れず、

「あなたは？」

と尋ねた。

「あなたは信用できるの？」

魔女は言葉に詰まった。

「どうしたのよ。商売人なら、客の一人ぐらい信用させてみなさいよね」

にやにやする白雪。「殺す気なら騙しおおせてみる」と暗に言われていることに、魔女は少なからず腹を立てた。

「お客さん。うちのリンゴは本当にいいリンゴですよ。何なら儂がひとつ、毒味して進ませましょう」

籠の中から適当に一つ掴み出し、毒のない側にかぶりつく。

「ほら、いい音でござんしょ。うーんジューシー！ どうです、こっちの半分だけでも召し上がってみませんか。ナイフでお切りしましょう」

「どうだと言わんばかりに差し出した。

「いえ、結構よ」

「えっ」

虚を突かれて見ると、白雪は冷やかなクレーマーの表情を浮かべていた。

「あなたね、後で切るからって商品に直にかぶりついて、それを客に勧めるなんて正気？ 試食なら最初から小さく切り分けなさいな。そのやり方じゃ……まるで、『片側にだけ問題がない』みたいよ」

最後の数語を、白雪は最高に意地の悪い笑みを浮かべて口にした。魔女は作戦がバレたことを確信し、撤退の意志を固めた。この女は、一度疑いを強めれば決して隙を見せないだろう。

「だから」

白雪姫が言った。

「もう半分も、食べて見せなさい」

魔女は目を剥いた。そして自分をも殺そうとする白雪の狡猾さに戦慄し、しかしそれよりも、悔しさが勝った。

（馬鹿にしくさって……この私が自分の作り出した毒で死んでたまるか。きつと我慢すればどうということはない！）

魔女は大きく息を吐き出し、毒入りの半分に思い切りかぶりついた。口中の不快感をこらえつつ咀嚼する。白雪が面白そうに眺めている。

果肉がほとんど液体になってから、魔女は一口分の毒入りリンゴを思い切って飲み下した。

そのまま数秒

「……うっ。ぐ、げええッ」

我慢は、出来なかった。流石に死ぬまではいかなかったものの、胃の腑がひっくり返るような苦しみに、魔女はしばらくのたうち回

った。

地面を転がりながら、魔女は悔しさに齒噛みしていた。結局、白雪を騙しきることはできなかったのだ

「まあ、すっごい。素晴らしい商品ね」

そのとき、白雪が声を上げた。魔女はぼかんとして顔を上げる。

「ここまでやるだなんて、いい商売根性じゃない。敬服しましたわ。お母様。このリンゴ、いただきます」

魔女はあっけにとられた。白雪は無造作にひとつリンゴを掴みだし、子細に眺めると、毒入りの側を自分に向けて。

「おいしそう……」

呟いて、うっとりした横顔を見せた。

いまだ状況の掴めない魔女に向かって、白雪は流し目で笑ってみせる。

「いい戦いでしたわ、お母様。私、こんな最期をずっと望んでいたのよ。……あなたの勝ち。騙しきられて私は死ぬ……さよならよ」「しゃくっ、とリンゴが鳴った。

14・persuade(後書き)

「」を説得する「、」
「」を信じさせる「。」。

「おつかしーな、みんないるだろ？」

「誰か来てない奴いるっけ？」

みんなが首をひねっている中、俺は一人苦い顔をしていた。どうしてみんな、あいつのことを思い出せないのだろう。

高校の同じクラスの連中が、十年ぶりに再会する同窓会。幹事はちゃんと当時の名簿を引っ張り出して、全員に連絡したはずだ。出欠だつてきちんと管理して、誰が来るかはわかっていて、と本人も言っていた。

それなのに、出席者の人数が一人足りない。一人分の席がぼつかりと空いている。幹事は名簿をうっかり忘れてきたらしく、それでも全員の名前はそらんじているとあって、出席者と欠席者を一人一人あげて見せた。

あいつの名前を除いて。

「なあ、これってちよつとしたホラーだよな」

「当時いなかった誰かに、いつの間にか連絡していて……みたいな？」

「ひゃーっ」

みんな謎の欠席者のことは、最初から存在しないものとして扱うらしい。この空気では、あいつのことを言っただって信じてもらえないなんてこともあり得そうだ。俺は黙っていることにした。

俺は高校時代、そんなに友達が多いほうではなかった。数人の仲のいいグループに入っていて、その一人があいつだった。

決して、影が薄いつてわけじゃない。暗い性格でもなかった。むしろいつも朗らかで、ユーモアのきいたいいやつだった。特に人を褒めることにかけては一流で、どんな人間に会ってもその人間の長所を見つけてしまう。まったく正反対の性質でも平等に褒めること

ができる。

「どうやってるんだ、と尋ねたら、簡単だよ、という前置きをしてこう返ってきた。」

「謙虚になればいいんだ。どんな人間からも学ぶことができる、尊敬できると思えば、本当に会う人みんなの個性が面白くて素晴らしいものに見えてくるんだよ」

「当時はあきれ返ったが、今となってはあいつがどれほどすごいことをしていたのか、正直俺には想像もつかない。生きてれば嫌いな人間の一人や二人出てくるだろうし、それを妥協したり理屈で納得したりしたって、結局互いに譲れないものというのは、経験上どうしても生まれてきてしまう。俺なんかは、人間の好き嫌いの基準が自分のアイデンティティだと思っているくらいだ。」

「なのに、あいつはどうやってすべての人間が好きだなんて言えたのだろう。今でもそういう生き方をしているとしたら、どんな人間になっているのか。だから、今日は本当に会うのを楽しみにしていたのに。」

「誰かテレビ局とかにコネないの？ ネタになるんじゃない、これ」

「いいね。『35人目のクラスメイト』、みたいな」

「おお、ほんとにおもしろいかも」

「なのに、こいつらときたら。」

「……あのさあ」

「とうとう俺は、口を挟んでしまった。」

「いないのって、あいつじゃない？ あの……」

同窓生たちが怪訝な顔でこちらを見る。それはそうだ、誰も覚えていないどころか、知らない時まで思っているやつを、俺が覚えていたというのだ。期待を一身に向けられて、俺は少し動揺した。

「ほら、あいつだよ。あの、人を褒めるのが得意なやつ」

「人を褒める……？ え、何て名前だっけ？」

「だから、ほら、あいつ……」

「んー？」

慌てているせいだろうか、どうしたことがあいつの名前が思い出せない。対して親しくもなかった連中の名前だって、全員わかるというのに。

「どんな顔の奴。男子？ 女子？」

「えつと……」

そうだ似顔絵でも、と思つて、今度こそ愕然とした。あいつの顔が、思い出せないのだ。どのくらいの慎重で、どんな髪型で、どんな目鼻立ちで、どういう風に笑っていたか……印象的だったはずのあいつの言葉も、声の記憶がなんだかうすばんやりして怪しい。

そんなはずはない。そんな影の薄い人間であつたはずがない。だってあいつは、本当にいい奴で。

と、そこまで考えて、おや、と思つた。あいつのいいところって、いったいなんだつただろう。人を褒めるところ？ だが、どうしてあんなに人を褒めていたんだ？ 一体、あいつは何が好きで、どういう風になりたい奴だつたんだ？

「おい、なんだよ。誰だよ、そいつつてさ」

「……ごめん、やっぱ思い出せない」

「なんだそれ」

曖昧に笑つて、俺は元の席に座りこんだ。俺は、あいつの友達だつたんだろうか。記憶に残っているのは、あいつの褒め言葉だけだつた。

15・admire(後書き)

「
」に感心する「
」
」を尊敬する「
」
」を賞賛する「
」。

アンパンマンより、ばいきんまんが好き。勇者より魔王が好き。三下の悪役がやられると残念そうな顔をする。

彼はそんな人だった。

だから、一つ作戦を立てた。

「ねえ、今出て来れない？」

『行けるけど、何だよ』

眠そうな声の彼。もう昼下がりに。昨日の夜、電話に出なかつたくせに やっぱり、そうなんだね。

「今ね、B子と一緒にんだけど、三人で映画でも行きたいなって」

『B子?……そうなんだ。まあ、じゃ、着替えてから行くわ』

待ち合わせの場所と時間を確認して、電話を切る。着替えるなんて、普段はラフな彼にしては珍しく気を遣ったものだ。

「そうだよね……あんたがいるんだもんね」

私はそう言ってB子に笑いかける。B子は困惑の目で私を見た。

暇を潰しながら、待つこと三十分。彼が待ち合わせ場所に現れた。キョロキョロと私達を捜して、それから電話を手取る。

『もしもし? どこいんの?』

「ごめん、暑かったから移動しちゃった。案内するから来てくれる?」

寂れたビルの屋上から、彼が頭を掻くのが見えた。

『いいけどさ。つたく、適当だなーお前』

軽い笑いを返して、ナビを始める。彼が近づくにつれ、彼の声が困惑と不審を帯びてくる。

『おい、こんなとこで何やってんの』

「いいからいいから、階段の突き当たりのドアね」

彼が生返事をする。目の前のドアがゆっくり開く。

「……ようこそ、わが城へ。なんちゃって」

「お前……」

彼の声が受話器から遠ざかる。携帯電話が、コンクリに落ちた。

「なに、やってんだよ」

「悪者ごっこ。好きでしょ？」

「な、何言って」

彼を遮って、人質が声を上げた。とはいえ、苦勞しながらはめた猿轡があるから、言葉になんかなくてない。

「…… B子だよな？」

「そう。私の人質」

「ふざけんなよ。お前、なんだそれ」

「人質だけど、解放の条件はないよ。アレだよ、エサってやつだったから。もう用済みだよな？ その方が悪者っぽいし」

「何言って……」

彼が息を飲んだ。私はこれ見よがしに、B子の頬に当てたカッターナイフをきらきらさせて見せる。

「近づくな。この女がどうなってもいいのか」

「は？」

「こいつの綺麗な顔に傷を付けたくなければ、そこから動くな」
「な……」

彼はすっかり訳が分からないという顔で、おろおろしている。私は嫌らしく笑みを浮かべた。

「お前はこういう娘が好みなのか？ いい趣味だな、え？ 赤い血がよく映えそうじゃないか」

「わ、わかった！ やめろって、なんだよやめろよ！ えっと……謝るからさ、とにかく……」

「ほう、そんなにこの女が好きか」

彼が目を瞬いた。

「好きなんだよね」

困惑が、まさか、という驚きの表情へ。

「私よりも」

「……それは」

「言い訳はよせ。お前は無力だ」

「ごめん……だから」

「罪は償われねばならない」

B子のほつぺたの柔らかさが、ナイフ越しに伝わってきた。その肌を慎重に、喉までなぞり下ろす。

「やめる！」

悲鳴みたいな声だった。私は笑い出してしまふ。

「ねえ、こんなときはヒーローが現れるんでしょ？ それで、もうちよつとの所を邪魔しちゃうんだよね。残念だよね、可愛い子が痛めつけられるシーンが見れなくて」

彼が眉間を情けなく歪めた。

「ごめん……許して……」

「わあ、いい台詞。ノリノリだね。やっぱりそうなんだ、こういう場面最後まで見たかったんでしょ？」

「頼むよ……」

「うん、頼まれた。お望み通り、一番酷いやりかたで殺してやろう」
B子がか細い悲鳴をあげる。

「やめてくれ……」

彼は泣き出し、崩れるように膝をついた。あんなに残酷シーンが好きだった人が。こんなに私の心をぼろぼろにした人が。

私は笑った。思いつきり声を上げて笑った。彼は両手までついてうずくまっている。そうか。恋人を人質にされると、ああなるんだ。「ごめんなさい……ごめんなさい」

「悪いな」

私は、極力冷たく言っただつもりだった。なぜか声が掠れていた。取り出した携帯電話に、雫が落ちる。……おかしいな。

「もしもし、警察ですか」

彼が、がばつと顔を上げた。

「A子っ……っ？」

「残念だったね」

携帯を閉じる。彼の顔を見たくなくて、私は地上の人間どもを見下ろした。

「ヒーロー、来てくれるってさ。がっかりしたでしょ」

ナイフを投げ捨てる。彼は何とも言えない息だか声だかを吐いて、B子に駆け寄った。心底、がっかりとは程遠い声だった。

お幸せに。

皮肉たっぷりに発した台詞は、声になっていなかった。

16. disappoint (後書き)

「」を失望させる」。

自由になれると思った。

「でき、聞こえるように舌打ちしてやったのよ」

「わあ、大胆ですね……」

「だってみんな来たくて来てんだよ？ 折角取れた席をさ、居眠りに使っちゃったの」

「……確かに」

愛想笑いで先輩に同調してみせる。私も別のセミナーでは寝てました、とは口が裂けても言えない。

正しさなんてない。

間違いもない。

だから、全ての価値観を受け入れる人間になる。

そんな風に決めた 決めていた。

「要するにさ、ゆとりつてのは勘違い野郎の集まりなんだよね。お前らなりたて社会人に自由とかなんか言いたい」

「あー、義務果たした上での権利ですもんね」

でもその義務が何なのかってことは、みんな考えないんだけどね。これも、言えない。

違うものに出会っては、理由を考えた。

認めれば不条理も当たり前前の存在になった。

自分が広がっていくようだった。どこまでも見渡せる気がした。油断していた。

いつの間にか、私の「自由」は薄っぺらで頭でっかちな、私自身の重しになっていた。

私は、何も出来ない、何も知らない人間になってしまっていた。

「個人の意志だって言えばなんでも許されると思うなよ」

「はは……」

その通りです、ハイ。

私の自嘲の笑みに先輩は気付かなかったようで、煙草を吹かしながら愚痴を続けている。

私の中に渦巻くのは、昔のような分析ではなく、自分の醜さを認めないための苛立ちだった。

17. expand (後書き)

「」を拡大する「、

増大する「、

膨張する「。

モノというのは、生み出されて五十年が経つと魂を宿すという。

ただしこの言い伝え、人間たちの間ではあくまでも迷信か教訓の道具であり、あまり真面目に信じている輩はいない。第一、魂があるうがなかるうが、モノがひとりでに動くなんてことはないのだから。「はあ、あ、退屈だなあ」

そんなわけで、自我はあっても意思通りの動きなどできない、記念碑的彫像であるところの彼女も、毎日人間から見上げられてポーズをとっているだけの日々を過ごしていた。

「何か面白いことないかなあ」

彼女は自分から変わったたり、何かに働きかけることはできない。加えて、彫像であるということ、人間たちから押し付けられたイメージを好き嫌いにかかわらず表象しなくてはならないということだ。彼女にとって、それは窮屈なことだった。

こらっ、落書きするんじゃない、悪がきども！

わあ、逃げろ

足元でざわつく人間たちのほうから、ちよつとした騒ぎが聞こえてきた。

片づけていかないか！ まったく、近頃のがきときたら分別がないんだからな

腰に手を当てて立腹しているのは、気難しそうな五十男だ。男は彼女のほうを見上げて、やれやれ、あなたも大変ですね、といった風な馴れ馴れしい笑みを投げかけた。彼女はといえば、舌が動くものなら舌打ちしてやりたい気分だ。落書きなんかがどうだというのか。いつそ全身パステルカラーで塗りなおしてもらいたいくらいなのだ。

「やあ、いい天気だね」

機嫌を損ねているところに、そんな声が出た。視界を横切って彼

女の肩にとまったのは、一羽の大きなカラスだ。

「どうしたんだい、妙に元気がないじゃないか」

「人間どもが見当はずれな気を遣うから、あたしも疲れちゃうのよ」
彼女は答えた。年を取った動物には、彼女のような存在の言葉が届くこともある。

「そうかい。大変だねえ、僕も人間にはうんざりしてるんだが、君なんかその比じゃないだろうね」

「そのとおりよ。ほんとにはあたしに興味なんかなくせに、都合のいい時だけまつりあげてさ。シンボルだなんて言われちゃったりして、じゃあこのカツコ真似してみなさいよってことよ」

カラスはしばらく黙って彼女の愚痴を聞いていたが、ふと、思いついたように口を開いた。

「君、変わりたいのかい？」

「ええ、できればね。いいかげん腕もしびれちゃったし、一回寝ころんでみたいわ。この固い台座から降りて自由になりたい」

「ふうん」

カラスがにやりと笑った気配がした。

「じゃあ、僕が君を寝かせてあげよう」

それを聞いて、彼女は笑い出した。カラスなんかには何ができるっていうんだ。

「簡単さ。僕は君と違って動けるからね、なりは小さいけど、ちょっとなら人間を従わせることだってできるんだ」

「へえ」

彼女は半信半疑で、からかうような相槌を打った。体が石でなければ肩をすくめていたところだ。

カラスはそんな反応を意にも介さず、「まあ見てなって」そう言うのと、瞬く間に空高くへ飛び去って行った。

彼女はカラスの姿を見送りながら、ため息をつきたいような気分になった。親切なカラスだが、ほら吹きはいただけじゃない。あたしはきつと、ここで立ち続けて、人間たちに見向きされなくなったら、

雨風にさらされて朽ちていくだけなんだ。それに、人間の起こすちよつとした騒ぎなんて、そよ風ほどにも感じないんだから。

カラスが飛び去って、まる三日が経った。やはり彼女の毎日に変化はない。ここ数日、気候のバランスでも悪いのか空から不穏な音が聞こえたりしていたが、堅牢な像であるところの彼女からすればどうでもいいことだった。

何度目かの独り言を漏らそうとした時、ふと、肩に何か降り立った。

「やあ、女神さん。ヒマしてたかい？」

あのカラスだ。

「いつも通りよ。あなたは何してたの？ 人間どもからブルドーザーでも徴収してきた？」

「近いけど、ちよつと違うね。もつと派手なことさ」

思わせぶりな言い方に、彼女は口をつぐんだ。

「わかんないかな。じゃあ、ヒントだ。その一、そいつは空を飛ぶ。その二、そいつは人間どもの兵器だ。その三、僕は仲間と一緒にそいつの鼻づらをつついてやって、ちよつとしたトラブルを起こしてやった」

彼女は少し考えて、それから、声を震わせた。

「……わかりやすすぎるわよ。ねえ、あんた、何したかわかっているの？」

「君こそ」カラスは笑った。「人間に毒されてるんじゃないのかい？ この国なんかは何の義理があるっていうんだよ。これで君はきつと変われるし、僕は元々どこにだって行ける。おたがい、これらの人生を楽しもうじゃないか」

ほほえみを残して、再びカラスは消えた。

三日前から聞こえていた空の音が、何倍にも増幅して近づいてくる。もうすぐ彼女の見下ろす人間どもの世界は火の海になるだろう。そうしたら、体を無理やりねじってでも、人間どもが一番集まっ

いる場所に向かって倒れこんでやろう。
そして彼女は文字通り、自由の女神になれるのだ。

18・preserve(後書き)

「」を保護する「」、
「」を保存する「」、
「」を保つ「」、
「」を維持する「」。

カーラジオは無難なトークとクラシック、それに聞き取れない韓国語だけで埋まっていた。舌打ちをし、スイッチを切り替え、音楽プレーヤーを繋ぐ。ボリユームのつまみをめいっぱい捻ると、窓を閉めていても、夜中の山道に重低音のリズムが響き始める。

アクセルを踏みつけた。エンジンが唸りを上げる。見える景色はかなりの範囲が真っ暗な森で、しばらくは他の車両になど出会わないだろう。

「あーなーたのおーっ」

音楽に合わせてがなりながら、ハンドルを切った。タイヤを思い切り滑らせながらコーナーをクリア。「社用車」の文字が視界の端に映る。

知るもんか。

スピードを上げ、尚も歌い続けていると、脳内の細かいあれこれを塗りつぶして熱が弾け始める。エアコンを強くした。

眼前にヘアピンカーブが迫っている。道の外は崖、車はトップスピード。冷風の吹き付ける肌からまた熱が吹き出す。

曲も丁度サビの部分に差し掛かっていた。ドラマみたいなチキンレース。悲鳴のように歌い続ける。

森の闇が、真正面から襲ってきた。

ブレーキ……。

『何度言ったら覚えるんだ』

『応援してるからね』

『あいつ、学校やめるって』

『大人になったら分かるさ』

『赤組、優勝オー！』

金属の擦れる、嫌な音がした。

全身から汗が噴き出す。かけっぱなしの音楽が頭に響いて耳鳴りがする。

詰めていた息を吐き出して、アクセルを緩めた。バックミラーには遙か後方のヘアピンカーブが映っている。弱い笑いが漏れた。対向車に気づき、音量を絞った。

帰宅してみると、社用車の左側にべったりとガードレールの跡がついていた。深い溜息について、アパートの階段を上る。自室にたどり着くなり、電気もつけずひきっぱなしの布団に身を投げ出した。喉が痛い。踏みっぱなしだった脚が震えている。

今日は、頑張ったな。

頭の中で、そう言葉にしてみた。

『何を？』

小さく返事が返ってくる。声の主は、上司か、友人か、親か、それともあの頃にいた少年か。

頑張ったよ。

枕を頭から被って、きつく目を閉じた。

19・struggle(後書き)

「苦闘する」
「努力する」
「もがく」
「〜に取り組む」。

私の仕事は、お屋敷の掃除だ。最初のころは廊下や窓を拭き清める仕事の主だったが、最近では食器や小物を磨きあげる仕事を任されている。

この仕事をしていて最も嬉しいのは、お嬢様が我々を誉めて下さる瞬間だ。お嬢様は賢く優しい方で、お屋敷をきれいにする人間がいることを分かってくださり、また、勿体なくも我々にお礼などを述べて下さる。誰にでもそうなのだが、特にご自分のお気に入りの場所や物には、大変なお喜びを示されるため、受け持つ者も鼻が高い。

そんなお嬢様のお気に入りの一つが、玄関に飾ってある人形のコレクションだ。陶器製の、貴婦人たちが舞踏会を行っている場面のミニチュアなのだが、非常に精巧にできているため、隅々まで磨き上げるのはなかなかの苦労である。私は何年も前からこの仕事を担当しているのだが、それというのも、最初に私が磨いて並べた時、お嬢様がそばにいらして誉めて下さったからなのだ。

以来、努力を重ね、なるだけご期待に添うよう正確無比な美しい仕事を心がけてきた。聴くあらわれるお嬢様はそのことにもきちんと気付いてくださり、「人形たちがいつも綺麗でとても嬉しい、あなたが同じように並べてくれたものでなければ落ち着かない」とまで言ってお下さるようになった。

お嬢様は、この近郊では唯一と言っていい、大変な資産家の一人娘でいらっしやる。それゆえか、噂では同年代のお友達も少なく、ご自分ひとりのご趣味が心の慰みであるらしい。玄関の人形もその一つで、すれば、私はお嬢様の御心を慰める、いわば手伝いをしていくのだ。そう思うと、自分の仕事が誇らしくもあり、またお嬢様がますます愛おしく、おいたわしく思えてくるのだった。

そのようにして、変わり映えのない日々を保ち続けていたある日のことだ。

お嬢様が結婚を申し込まれた、という話が、にわかに耳に入ってきた。

屋敷の中は喜びと驚きの声で急に浮ついた空気になった。相手はどうやら、こちらを上回る資産と権力を持った家の跡継ぎらしく、しかし決して政略結婚ではなくお嬢様を一目見て見染めたのだ、と主張しているという。メイドたちの噂話では、なかなかの美丈夫であるとのこと。どれをとっても非の打ちどころのない縁談であるように思えた。

そう、非の打ちどころはない。文句のつけようがない。そもそも、文句のつけどころがあったところで、我々のような一介の手伝いが口を出すことなど許されない。私はただ、来るべき婿殿の訪問の日に備えて屋敷中を今まで以上に磨きあげればいいだけなのだ。

「ねえ、あなた」

考え事に没頭していた私は、突然の声に思わず人形を取り落としそうになった。振り返ってみれば、お嬢様が怪訝そうにのぞきこんでいる。

「お仕事の邪魔だったかしら」

「いえ……」

「お願いしたいことがあるの」

申し訳なさそうなお顔でお嬢様が仰ったのは、私に、婿殿の訪問を取り仕切ってほしいというお話だった。

私は仰天した。そもそも、お嬢様の身の回りのお世話すら許されず、ただ清掃だけを受け持っている、いわば下っ端中の下っ端である私が、なぜ急にそんな大役を任されるのか。だが、ほかならぬお嬢様の頼みである。拒否権はない。

「喜んでやらせていただきます」

頭を下げた。

それ以来、私は以前に増して忙しくなった。掃除の受け持ちは少

し減らしてもらえたが、それでも全くなくなつたわけではない。殊に、あの玄関の人形だけは自分が担当したかった。連絡や打ち合わせなどで駆けずり回って、余つた時間に何とか清掃をこなすという習慣通りにいかない日々は慣れない疲労を生み、夜は短い時間を泥のように眠つた。

それでも、私は嬉しかった。お嬢様が、理由はよくはわからないが、信頼して下さっているということ。お嬢様の将来のためにお手伝いができるということ。そして、それらのことを深く考え込むだけの時間が無くなった、ということが。

だが、それがよくなかつたのだろうか。

おそらく疲労のため、考える力や集中力を欠いてしまつたのか。朝一番で玄関に向かい、人形を磨いていた時だ。自分でも何だかわからないうちに、手が滑り、人形を取り落としてしまつた。

慌てて拾い上げたが、後の祭りである。大きな損傷はなかつたが、精巧に作りこまれた指先が、ごまかしようもなくぼつきりと欠けてしまつていた。私の頭の中に、一瞬にして嫌な想像が駆け巡つた。お嬢様が悲しい顔をなさる。私はきつと大変な失望を受けて、お屋敷を追い出されてしまふ。お嬢様は、お氣に入りのコレクションを台無しにされて、ふさぎこんでしまわれるのではと、そのときだ。

ふと、私の中に、ひとつの考えが浮かび上がった。嫌な考えだ。考えを深めてみても、どうやらそれは試す価値があると考えられたが、同時に嫌悪感がわきあがってきた。ぞつとするほど、嫌な考えだつた。

だが　そう、今日はちょうど、午前中から婿殿がいらつしやる日なのだ。

「お嬢様、支度が整いました」

「ありがとうございます」

お嬢様はにこりと柔らかにお笑いになつたが、その目は期待と不

安がないまぜになつて、きらきらとつろつろ光をたたえていらつしやつた。あるいは、このまなざしにはもうお目にかかれなくなるかも知れない。そう思うと今更のように躊躇が生まれたが、もうやつてしまったことだ。

私は涼しい顔を作つて、お嬢様にあいさつすると、玄関へ婿殿を迎えに向かつた。

到着した婿殿は、噂通りの美男子であつた。物腰も丁寧で、寛容な人柄がうかがえる。お嬢様のお相手としてはまさに申し分ないと言えた。

そこへ、

「ようこそいらつしやいました」

とご主人様とお嬢様が現れる。

「立派なお屋敷ですね」

「いやいや、君のお父上のお屋敷に比べれば」

「私はこういつた建築の方が好きです。父は派手好みで」

「それは。ま、立ち話もなんですから……」

「はい。おや、こちらのお人形は、お父様のご趣味で？」

私は緊張に体を固くした。お嬢様が、婿殿の視線を追うようにお顔をあげる。

「いえ、それは娘の。昔からこういつこまごまとした……」

「えっ？」

お嬢様がお声を漏らし、婿殿の視線をさえぎるようにして、人形の前に立つた。

「これは、これは一体、どういふこと」

思った通り、大変動揺され、私の方を継るような目で見て問い詰められた。私は苦しげに顔をゆがめ、深々と頭を下げる。

「大変申し訳ございません、お嬢様。先に申し上げようとも考えたのですが、騒ぎになつてお客さまにご迷惑をおかけしてはと……」

「いいから、わけを話して下さい」

お嬢様の動揺ぶりに、婿殿は面喰っている様子だつた。彼には何

がどうしたのか分かるまい。なにせ、コレクションの人形が一体減っていることなど、お嬢様と私の他には気付く人間などいないのだから。

「実は……私が今朝磨きに参ったときから、一体欠けていたのでございます。取り去った者がいると考えるのが妥当ですが、犯人探しは今やるべきではないと考えましたので」

「何を言っているの？ 今すぐ、探さない、早くっ」

お嬢様は半狂乱だった。ここまでの混乱を、予想しなかったわけではない。

というよりは、面白いほど私の計算通りである。

婿殿は驚きを通り越して呆れ返り、ご主人様は、お嬢様を宥めすかすのと婿殿への説明の両方をなさろうとしてすっかりあたふたしたご様子だ。私はひたすら頭を下げる一方で、ご主人様へ「一旦お帰りいただいたほうが」と耳打ちした。

結局、その日予定されていた会談と食事はすべて延期となった。

婿殿はやはり心が広い方らしく、大して立腹された様子もなく、苦笑気味に引き上げていった。とはいえ間違いなく、お嬢様への心証は悪化したであろう。

人形を盗んだ犯人は、夕方までかけても結局見つからなかった。外部の者の犯行か、あるいはまだ隠している者がいるのだろうと、この日の搜索は打ち切りとなった。

夕食後。

私はお嬢様のお部屋の扉をたたいた。

「どうぞ」

招きいれられるが早いか、私はその場に膝をつき、深く頭を下げた。

「申しわけありません。人形を盗んだのは、私でございます。お嬢様がお慌てになり、犯人探して大騒ぎとなれば、婿殿との会食がなくなるのではと……薄汚い、計算の上でございました。クビになさ

るなり、鞭で叩くなり、どうなと好きになさってください」

覚悟の上と思っただけだったが、実際に成功してみれば、罪悪感で胸が潰れそうになっていた。どういう形であれ、私はお嬢様の幸せを邪魔したのだ。お嬢様が笑っていられるようにと、一心に人形を磨いてきた私が。

喉が震えた。恐ろしさと後悔で、俯いたまま動けなくなった。

「頭をあげなさい」

冷やかに、お嬢様が仰った。私は満身の力を込めて、ゆっくりと首をもたげ、顔を上げる。息を止め、思い切ってお嬢様のお顔を見た。

あつけにとられた。

私の想像していたお嬢様は 悲しみや、怒りや、失望を湛えたお嬢様は、どこにもいなかった。

お嬢様は笑っておられたのだ。私が、全く知らない顔で。

「お嬢様……？」

「バカねえ、もう」

「え？」

呆然とするしかない私の目の前で、とうとうお嬢様は、こらえきれないというようにクスクスとお声を漏らし始めた。

「最初から結婚する気なんかないわよ、あんな退屈男。どうやって断ろうかと思っただの。助かったわ、あなたの作戦。けど、意外と大胆なのね！」

そうおっしゃって、今度はお腹を抱えて笑いだした。ようやくわけがわかると、私は急に全身の力が抜けてしまい、その場にへたり込みそうになる。

「けど」

厳しい声に、また体に緊張が走った。

「盗んだだけじゃないわよね？ 何かきっかけがあったんでしょ。壊した……とか」

「も、申しわけございませんー！」

思わずその場に平伏する。頭の上から、お嬢様が鼻で笑う気配が伝わってきた。

「まあ、仕方ないわ。人形ならまた買えるもの。でも、女の貞操は一生に一度きりだし、ちゃんと自分の意思で守らなくちゃね。これからも、色々協力してもらおうよ？」

20・arrange(後書き)

「」の手はずを整える「、

」を手配する「、

」を配列する「、

」を整理する「。

「仕事が忙しいから、無理」

一言、そう言って通話を切った。老いた母のヒステリックな声を電源ボタンで断ち切って、携帯電話をベッドに放り出す。

父が危篤状態であることは、とうに知っていた。本人から知らせが届いたのだ。その時点で仕事の予定を調整し、帰省する余裕を作ることも、当然できた。だが、しなかつたのだ。

床に置かれた宅急便を一瞥して、枕に顔をうずめた。

*

私は、職場ではやり手のキャリアウーマンとして高い評価を受けている。男社会の中で人一倍突っ張って、前に出て生きてきたおかげだろう、今では一目置かれるようになったし、逆にプライベートでは距離を置かれることも多い。

「隙がなくて近づきにくい、完璧人間」

恐らく、誉め言葉ではないだろう。

しかし私も人間である。完璧などあるはずがない。一人暮らししているアパートは散らかりっぱなしだし、食事はほとんどコンビニ飯だし、好き嫌いも多い。おかげで社内外で会食をしようなどというときはある程度覚悟をしなければいけないのだ。

数ある私の苦手料理のうちでも、最も嫌いなのが納豆だ。匂いとか、食感とか、苦みとか、いろいろ理由はあるものの、一番大きいのは幼少時のトラウマである。夫婦そろって和食党の実家では食卓に納豆が上ることは少なくなき、そのたびに、なかなか食べられずに最後までテーブルに残らされたものだ。

母などは途中から、私に納豆を食べさせることを諦めていたのだが、父は違った。自分が納豆を食べるたびに、脇にいる私にも「食

え、食べ」といつて押し付けてきた。

多分、嫌がる私の反応を楽しんでいたのだと思う。

その証拠に、父は私の口に無理やり納豆をねじ込んで二ヤニヤ笑っていたし、逆に私がさっさと逃げてしまっても叱ったりはしなかった。笑って、「健康になれないぞー」とからかうように叫んでよこすだけだったのだ。

だが、それはまだましな方だった。夕チが悪かったのは、私の納豆嫌いを、食事の場以外でも利用するようになってからだ。

家の手伝いを残して、友達と遊びに行く時。

夜、彼氏の電話で呼び出された時。

家族で映画を見る約束を、ドタキャンしようとした時。

父は必ず冷蔵庫から納豆を持ち出して来て、私の目の前に突き付けた。「これを食べれば、好きなようにさせてやる」と。私も私で、そんな不合理な取引は放り出してしまえばよかったのだが、意地がそうさせたのか結局は納豆の前に敗北し、父の思う壺にはまってしまうのだった。

そんな風だったから、私の青春時代は納豆との戦いに費やされたと言っている。

父が邪魔しそうなことをする時は、冷蔵庫を確認してから早めに行動した。納豆の臭いをかぐと不安になった。納豆は父の「NO」であり、常に私の道に立ちふさがる、敵だった。

その納豆が、今、冷蔵庫の中に山ほど積んである。宅急便で送られてきた段ボールいっぱい詰り込まれていた納豆パック。

同封されていた便箋には、たった一行、

「父危篤 仕事がんばれ」

と、書いてあるだけだった。

本当に、仕事は調整できたのだ。確かにもうすぐ決算だし、忙しい時期ではある。なかなか休みがもらえないと噂される、厳しい業

界でもある。けれど、父の死に目に立ち会うことすら許されないほど酷な職場ではない。

なのに、この納豆。

父は知っている。私が、もう一口も納豆を食べられないことを。だからきつと、これは

「ちくしょう、バカ親父」

私は冷蔵庫を開けた。醤油とマヨネーズをボトルごと、からしのチューブと、炊きたての白米二合。

「言うことなんか聞いてやるもんか」

納豆の糸が、蛍光灯の光にきらめいた。

21・disturb(後書き)

「」を妨げる「、

「」を不安にする「、

「」をかき乱す「。

「ねえ、最近なんだか顔色がいいんじゃない」

母親にそう言われて、ヤスオは唇を尖らせた。

「べつに」

「よくなったわよー。ちょっと肉付きもよくなってきたし。成長期かな」

「るせーな、どーでもいいだろ」

夕方のニュースを見るのを中止して、自分の部屋に戻る。ベッドに身を投げ出した。

ヤスオの健康が改善されてきたのは、ここ一カ月ほどの事である。別にそのこと自体が不満なわけではない。明確な原因があって、その原因がヤスオには気に食わないのだった。

「おはよう、ヤスオ君」

「よう、ヤス」

クラスメイトの態度は、一か月前とは一変し、よく言えばヤスオが入学したての頃と変わらないくらい親しさを見せてくれるようになった。上履きを汚されたり教科書を捨てられたりしていた頃と比べると嘘のようだ。

ヤスオは表面上、いかにも何もありませんでした、僕たち前から友達だよね、という風に挨拶を返す。現金なクラスメイト達に腹が立たないでもないが、負担がなくなったのはいいことだ。

「そうだろー？ 良かったじゃん、俺のお陰だね」

「っせーな、寄生虫」

放課後。

いつもの帰り道、決まった曲がり角で出会った青年をヤスオはぞんざいに突き放した。

「つめてーな、いじめっ子退治してやったる？」

「頼んでないし」

「ちえ、ヤス君のツンデレ」

ひょうきんな仕草でぶーたれる青年の名前を、ヤスオはいまだに知らない。知り合ったのは、一か月と少し前。びしょぬれになった制服の代わりに体育着のジャージで帰宅していたヤスオを、笑って追いかけてきたのがこの青年だった。

友達にならないか。

最初は同情だと思った。惨めな気分になった。だから逃げたし、無視したし、時には物を投げつけたりした。あんまり無防備にからんでくるし、ヤスオが年下だからか怒りや敵意を向けたりもしないので。つまり、八つ当たりしやすかったのだ。

そういう自分に気付かないほどは、ヤスオも馬鹿ではなかった。

「お願いだから、もうやめてください」

知り合って初めて敬語で頼んだのが、丁度一か月前。青年は眼をぱちくりさせて、なんのこっちゃ、といったふうには首を傾げた。

「俺は君と友達になりたいだけだよ？ それに君も俺でストレス発散してたじゃん」

ばれてた。

恥ずかしさのあまり俯いて動けなくなったヤスオをひとしきり眺めた後、青年は言った。

「じゃあこうしよう。君が罪悪感持たなくていいように、俺が君を拘束しちやおう」

不穏な単語に、ヤスオがぎくりとして顔をあげると、

「君を俺の友達に採用します。雇われてよ、中学生」

そんな風に、嬉々として青年は指を突き付けてきたのだった。

雇用条件は悪くなかった。拘束時間は放課後の数十分から数時間だけ、福利厚生として学校生活の補助付き。プライバシー保護環境

も完璧。

つまり、ヤスオが何かしらちよっかいを出されるたびに、その報復を青年はこつそりやってのけたのだった。やられた連中も誰の差し金か気付いていないわけではなかったようだ。どういう工夫をしたのか、報復の報復という形でいじめが激しくなる事はなく、一か月たった今ではすっかり収束。よくあるパターンで、その連中が今ではクラス中の鼻つまみ者という状況だ。

「はい、今週のお給料」

青年がボロボロの財布を取り出して、千円札を二枚差しだしてくる。ヤスオはそれを嫌々受け取り、ポケットにねじ込んだ。

「来週もよろしくね」

笑顔。

満面の笑みだ。子供向けのご機嫌取りじゃなく、心底嬉しいといった調子の。

ヤスオも、疑問に思わなかったわけではない。遊び盛りの、多分高校生とか大学生ぐらいの青年が、どうして放課後ただの中学生につきまたって時間を潰しているのか。

多分彼は、友達がいない。その証拠に、といていいのか、青年はヤスオに一度たりとも憐れみや軽蔑の眼を投げた事がなかった。それが当然といった様子で、まるで本当に友達同士ちよつとした助け合いをするって感じで、面倒な報復をこなしてみせた。

なのにヤスオに金を渡す。

友達でいてくれと言っ。

「……帰る」

「うん、また明日」

夕日を背負い、爽やかに手を振る青年を一瞥して、ヤスオは誰にも聞こえない舌打ちをした。

確かに自分の惨めさを思っって部屋の隅で一人苦しむような事は、今では少なくなった。

けれど、時々、無性に腹が立つ。

青年がまるで、揉み手で精一杯の愛想笑いを浮かべ、足元にすり寄っているように見える事がある。いったい自分は、助けられているのか、それとも。

「大人つて、汚えよな」

そんな決まり文句を殊更に呟いてみて、ヤス才は自嘲的に口元を歪めた。

22・employ(後書き)

「」を雇う
「」を用いる。

人間の体は、いつも自分の思い通りに動くとは限らない。

「ああ疲れた。全く、最近仕事がきつくて困るよ」

「お前もか。実は俺もなんだ、急にノルマが厳しくなって……」

「そうだよな。あれ、どうやら上がなんかやってるらしいぜ」

「上？」

「どうも管理が腐ってきてるらしい。そのお鉢が俺らに回ってきてるんだ」

「マジかよ。外には見えないからって好き勝手されちゃ、たまったもんじゃないぜ」

「そうそう。俺達は機械じゃないんだ。いい加減、限界つてもんがあるぜ」

人間は、自分の体を労らなければならない。さもなければ……。

「おい、おいどうしたんだ」

「なんだなんだ」

「ポンプ係が急に倒れたんだ」

「こりゃひどい……栄養不足だ」

「栄養不足？　こんな飽食の時代にか？」

「働きすぎたんだ。まともな食事をする余裕もなかったんだ」

「なんてひどい！　これじゃこれから何人犠牲になるか」

「上は幾らでも入れ替えられると思ってるんだ。俺達を大事にしなければ体ごと倒れるだけなのに」「もう我慢できねえ……こんな仕事

辞めてやる！」

「やめろ、死ぬぞ」

「構うもんか！」

自分の体は自分だけのものではない。栄養をやらなければまともには動かなくなってしまふ。

それどころか、自身に体が仇なすこともあるのだ。

「ストライキだ！」

「ダメ上司をやめさせる！」

内蔵も血液も、ひどく苦しんでいた。それでも一個の肉体の管理を成り立たせようと必死に働いた。

だが主人が無能だと、どんな優秀な機能も活躍の場を失ってしまふ。

「腎臓の仇！」

「白血球係長をよくも！」

「死んでしまえ！」

九時のニュースです。先進国各地で相次いでいる突然死について、医療機関は死亡者が共通していわゆる成人病を

23・engage(後書き)

(- in A) 「Aに従事する」、「

参加する」、「

「Aを行う」、「

(- in B) 「AをBに従事させる」。

このままゆっくりと死んでいきたい。

そんな風にいつも思っていた。

障子紙を破るのが嫌で立ちつくしてたら、いつの間にかそれは鉄壁の要塞になっていた。僕なんかじゃ、破れるわけない。弱くて惨めで臆病な、そんな自分に酔っていた。耳に深々と刺したイヤホンからは、爆音が直接脳味噌と心臓を揺さぶって何もかも忘れさせてくれる。

けれど最後の「感動」の壁は破らない。うつかり泣いたりなんかしてしまったら、折角鈍らせた感覚が、現状認識と一緒に蘇ってしまっから。

だから僕は、いつも冷笑していた。

「へえ、あんた結構カッコいいわね」

そんな風に、モニターの向こうから話しかけられるまでは。

最初、僕はただぼんやりとしていた。アニメとか見てたんだっけ？ それとも、ドラマCDとか入れっぱなしにしてた？ いぶかしげに眉をひそめると、その声はまた話しかけてきた。

「あんたよ、あんた。しかめっ面してないでちよっとは喋ったらどうっ？」

偶然だ。いや、いたずらか何かだ。音声変換ソフトか？ でも、じゃあ、僕の表情なんか そんなの、あてずっぽうに決まってる。「あー、あたしにあんたの顔が見えてないって思ってるでしょ。黒髪ショートで青いフレームの縁なし眼鏡、鼻の右側に二個ほくろついている。信じた？」

啞然とした。それから恐怖がせりあがってきた。

ここは僕の部屋なのに。僕の空間なのに。どうして得体のしれないものが、僕を見て、僕の生活に割り込んでくるんだ？

壊される。

僕はとつさに、電源ボタンに指を伸ばした。が、

「ちよつと待って」

強い制止の声に引きとめられた。

「あたし、あんたに提案があつて来たのよ」

「提案……?」

思わず口に出してから、しまった、と思つたが、遅すぎた。女の声が華やぐ。

「やつと答えてくれた。そう、提案。ていうか勧誘かな。あんたもこつちに来ない?」

こちらに会話を強要するようなテンションだ。僕はプライバシーに土足で踏み込まれる嫌悪感に吐き気を覚えながら、しかし諦めて返事をした。

「こつちつて?」

「こつちはこつちよ。二次元の世界。あんたがいつも見てる世界だよ。食いぶちのために稼ぐ必要もない、肉体がどうか拘つたり悩んだりしなくてもいい。自由になれる世界だよ。好きでしょ?」

僕は笑ってしまった。女が言っていることは、あまりにも非現実的で、そしてベタなSF設定だ。二次元の世界に入る?

「やれるもんならやつてみたいよ」

呟くように言つて、ブラウザを閉じた。今起こつたことがなんなのかは考えたくなかつたが、夢とか何かのいたずらとか、とにかく下らないことには違いない。ハッカーが何かにやられたのだとしたら、パソコンを買い替えないといけないかもしれない。

「ねえ、待つてよ」

ブラウザが、勝手に立ち上がった。

「嘘じゃないつてば」

「……」

これは、いよいよタチの悪いウイルスか何からしい。侵入された実感が沸いてくると、不安と怒りとで奇妙にどこかが醒めた。声が再び制止をかけてきたが、今度はためらわず電源ボタンを押す。

が、シャットダウンできない。

「話を聞いてっつてば」

どうする。とりあえず放っておくべきか。

「ねえ、退屈なんですよ。その世界、楽しい？」

いや、コンセントを抜いてしまえばいい。しばらくしたら勝手に電源が落ちるはずだ。

「自分も世界も全部嫌いで、なんにもやる気が出ないみたいなのについて楽しい？」

けれど僕は、椅子に座ったままモニターを眺め続けていた。

「こつちに来たらいいよ。もうやることなくして退屈とか、そういうのないから。だってやらなきゃならないことなんてないもん。変な引け目なんか必要なくなるんだよ」

女の声は次第にゆっくりとした調子になり、甘い響きを帯びてくる。

「ねえ、来なつて。あんたもどうせ、自分がダメ人間だつて思いこんでるタイプでしょ。大丈夫だよ。勘違いだつて。体があつて現金があつて、そんな世界にいるからそういうこと思いこまされちゃうんだよ。ほんとはね、あたしたちはみんな自由なんだから。そうだよ、何やつたつていいじゃん。好き勝手やれないで、なんで生きる価値があるつての」

僕は返事をしなかった。これはウイルスだ。知らないうちにマイクとかカメラとか、いろいろ仕込まれていたに違いない。僕はいつの間にか膝の上で拳を握りしめていた。

「ねえ、決められない？ 簡単だよ、全部捨てればいいんだから。捨てたいでしょ」

「……違う」

「え？」

僕の返事がよほどうれしいのか、女はまた少し声のトーンを上げた。余計に腹が立つ。

「僕はダメ人間だ」

「だから、それは思い込み……」

「僕はクズだ！ 人間のクズだ！ 自分じゃ何にも決められない、好きなことも嫌いなことも、何もしたくないクズなんだよ！」

しばらく、おかしい沈黙が漂った。これがもし、すべて僕の妄想か何かだったら、とんだ間抜けな光景だ。

「……じゃあ、来ないの？」

返事があった。おかしいことに、少しほっとした。

「辛いのに、来ないの？」

「いいや。行きたい」

「え？」

今度は、心底不思議そうな声だった。

「行けるもんなら、行くよ。そうさ、僕はクズだから、多分ここじや何もできない。今まではそっちにのめりこむのも怖かったんだ。でも、もう決めた。行くよ」

とんだ茶番だった。僕は口元に微笑が浮かぶのを感じた。これもいつもと同じだ。嘘っぱちのドラマ性に酔っているにすぎないのかもしれない。けれど、泣きたくなるような何かが頭の中でガンガンいってて、未だに握り続けている拳は腕ごと震えていた。

モニターは沈黙している。

「どうしたの？ やっぱ嘘？」

問いかけた僕の声には、今にも笑い出しそうな色が含まれている。「嘘じゃ、ないけど」

ためらいがちに女が答える。

「あたし、あんたがそういうキャラだって思わなかったから。ちょっとやだなって」

「何勝手なこと言ってんだよ。連れてけよ。体なんか捨ててやるって言うてんだろ」

ははっ、フアンタジい。

「で？ どうやるんだ、やってみろよ。こっから手とか出てくるのか？ おい。なんかサブリミナル的なことでもやるのか？ 暗示効

果で精神異常に追い込むのかよ。騙されないからな。僕は疑り深いんだ。簡単に狂ったりするもんか。なんだよ、ほら、やれよ！」

芝居がかった台詞を吐きながら、僕の意識はずいぶんと遠くから自分を見ていた。現実から逃れるなんてことが、そう簡単にできるはずがないことは分かっている。ただ爽快だった、自分が、どこかに行くことを決めて、誰かに真っ向から主張して、脅しめいた台詞まで吐いている。鉄壁の要塞に、ちよつと爪を立てたみたいな気分だった。

とつとつ僕は口にした。

「……………なあんちゃって」

これはウイルスだ。善良なパソコンオタクを追い込むための。それとも、希望を与えるための？ どちらにしろ、僕は少しわくわくしていた。このテンションの高さを失いたくない。何をしたらいいか分からなかったけれど、もうずいぶん乗ってなくて錆ついた自転車の跨って海から山から駆けずり回りたい気分だった。

「このくそウイルス。ちよつと楽しかったじゃねーか。あーあ、散歩にでも……………」

「本当に、行きたい？」

「あ？」

「あんたそのテンションで、本当に、こっちに来たいと思う？」

数秒、考えた。

「うん。もう一緒だよ、こっちもそつちも」

「そつ」

顔、だった。

手でも、サブリミナル映像でもない、洗脳っぽい音声でもない。

モニター画面の質感そのまんまを張りつけたような、彫刻に似た女の顔がいかにもSFっぽくにゅつと飛び出てきて、とつさに事態を把握できない僕の目と鼻の先まで、いつの間にか迫っている。ついさつきまでの強気はあつという間に消し飛んだ。女の唇がささやく。

ありがとう、仲間になってくれて。もう逃げられないからね。

液晶色の唇が、僕にキスをした。全身の皮膚に静電気が走ったよ
うな気がして、頭の中が真っ白になる。女の顔ごと、モニターが何
十倍にも膨れ上がった気がした。数えきれない色の粒が、立方体
になって襲いかかってくる。

洪水だ。僕が選んで飛び込んだ嵐だ。

女が、ぴたりと僕の背中に張り付いている。僕は現実世界を捨て
たのだ。

少し恥ずかしくなって、僕は世界に向けて小さな笑いを漏らした。

24・abandon(後書き)

「」を捨てる「、

」を放棄する「。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8181q/>

ENGLISH WORDS 2

2011年9月23日03時10分発行